

厚生福祉

 時事通信社

104-8178 東京都中央区銀座5-15-8 時事通信社
 昭和28年5月30日 第3種郵便物認可
 毎週2回火・金曜日発行(但し祝日を除く)
 購読料金 税抜月額4,100円
 本誌掲載記事・写真などの無断複写、複製、転載を禁じます。
 ©時事通信社2018
 ◎誌面内容に関するお問い合わせ(編集部)
 kousei-dokusha@jiji.com

目次

連載	2
まちで、みんなで認知症をつつむ—大牟田市の認知症支援②	
デンマーク参考に「地域認知症サポートチーム」	
スコープ	6
仕事の「質」にこだわろう	
地域を支える	7
中央省庁ニュース	8
オンライン診療、症状安定患者に限定＝ガイドライン案を作成／未申告収入も悪意なければ例外＝生保受給者の収入で通知／高校中退者らの進路相談強化＝困窮世帯向け学習支援を拡充	
進言(埼玉県川口市保健所準備室長)	9
特集	10
ヒト動物キメラ研究、指針改定へ 動物体内でヒト用臓器作製を容認	
18年度厚生・労働・環境関係予算⑦	14
山形県 福岡県 熊本県	
私たちの工夫	17
訃報	18
「車椅子の天才学者」ホーキング博士死去	
ニュースフラッシュ	19
多子の一人親に生活費独自補助／貧困対策で調整役養成 ほか	

リビングウイイルに託す

私が終末期の医療に関心を持ったきっかけは、厚生労働省医政局長だった2004年、東京で開催された尊厳死の普及を目指す国際団体「死の権利協会世界連合」の総会で、基調講演を行ったときだ。退官後の06年に「日本尊厳死協会」に入会し、12年に理事長を引き継いだ。協会では自らが望む最期を迎えるため、終末期の医療に関する意思を書面にした事前指示書「リビングウイイル(LW)」を発行し、登録管理している。現在、協会の会員は11万人強。多くの方にLWの必要性を認識いただけるよう、協会ではその普及啓発に取り組んでいる。

協会のLWは、本人が健全な状態のときに書いて

理(財)日本尊厳死協会
 理事 長・岩尾總一郎



た包括的な指示であり、自分がどのような終末期を迎えるか、記した時点では分からない。高齢で病弱となったときに、乏尿、呼吸困難といった一時的な急性増悪が終末期か分からない状況に陥るかもしれない。

医療の手段は様々ある中で、現場の医師としては包括的に「何もしないでくれ」といわれるのが一番困る。たとえば、食べられなくなつたときには、胃ろうは造らないが点滴はしていただきたいなど、自分の思いや具体的医療に対する要望を記すことが必要になってきている。

すなわち、医療が多様化する中で、LWにも個別対応を求める声が多くなってきた。そこで今

年1月から、協会の発行するLWに「私の希望表明書」を付け加えることとした。表明書はLWに付随する書面で、自分の思いや医療に対する具体的な要望を記す。

私の場合は、①最期は病院や施設ではなく、住み慣れた家で過ごす②できる限り自立した生活をして、最愛の人との時間を大切に③自分で食べられなくなつたら、口から入るものは食べさせてもらおうが、その他の栄養補給手段はとらない④医師が回復不能と判断したら、どのような医療行為も不要である——の4点である。

昨年、古希を迎えたが、友人知人の訃報に接する機会が増えた。自分を含めて団塊の世代はあと5年もすれば後期高齢者になる。いかに充実した生と、自然の摂理に逆らわない死を迎えるか、真剣に考えるときが来ている。